

# 練馬古文書研究会会報

第 69 号

二〇二五年十二月十日発行  
練馬古文書研究会  
<https://www.tbhigoken.jp/~agame-y/>

## 目次

海陸の視点から「日本」を問い直す — 18世紀〜19世紀半ば	杉本 史子…………… 1
東高野山長命寺 検地帳の行方	寒河江耕作…………… 3
事務局通信	本橋 竹文…………… 4
	寒河江耕作…………… 4

## 【二〇二五年度講演】

### 海陸の視点から「日本」を問い直す — 18世紀〜19世紀半ば

杉本 史子

本講義では、18世紀〜19世紀半ばの「日本」の歴史を、海からの視点で問い直した。到達した知見のみならず知の生成過程まで含めてわかりやすく伝えるため、レジュメには要点記述ではなく文章で記述し、またビジュアルな画像を提示することで理解を助けるように努めた。

講演の冒頭では、「道と世界、表現。」(『東京人』二三七、二〇〇七)と題した、研究エッセイを紹介し、時間軸で考えることの多い、空間の問題まで視野に入れて研究してきたこと、そのためにいわゆる古文書だけでなく、古地図も分析の対象としてきたことを述べた。そして、地図とは、中立的な鏡ではなく、政治的な性格を持ち、世界を可視化し、世界や他者に働きかけるツールだとの基本理解を示した。

また、大学の仕事のなかで、大学構内の書庫に眠っていた史料群を担当することになり、研

究予算を取り研究チームを編成して史料整理を行ったところ、それらが今まで知られていなかった貴重な19世紀海図群であることを発見したことを、調査の画像をみせながら紹介した。海図とは、海川を航行するための図である。現代社会に生活している人々は、たとえばゲーグルマップを日々活用するなど、日常を地図とともに暮らしている。これらはその名の通り地の図⇨陸図であり、海運に関わる仕事やヨットの経験が無い限り、海図についてはほとんど目にすることはない。しかし、実は海図は、現在のわたしたちの世界観に密接な意味をもっている。

18〜19世紀にかけて登場した「新しい海洋」とはどのようなものだったのか、その「新しい海洋」は「日本」に暮らす人々にとって、どのような影響を与えて、こんにちのような国土観

が登場してきたのかについて、述べた(第二章)。「第一章 近世日本—地図の「開花の季節」では、第二章を考える前提として、なぜ近世日本が、研究上「地図の「開花の季節」と呼ばれてきたのかについて説明した。

16〜17世紀初頭は、「地球的世界の形成」と呼ばれる地球規模でのグローバルな交流圏が成立し、物と人の交流が飛躍的に高まった。この状況が、単に言葉による表現だけではなく、物事をひとつの空間上に図示して、共時的に把握する必要性を高まらせた。

従来の地図史の達成点を示す金田章裕氏の研究成果は、17〜18世紀に、すべてのジャンルの地図が「開花」したことを見事に提示している。その一方で、海川航行に関わる図(海図)についての関心が希薄であること、また「世界のなかに、いくつかの国家があり、国家のなかはいくつかの地域に分かれる」という見方は近代的新見方であり、この時代にも通用していたのではないということ、増田四郎氏、黒田俊雄氏の議論を紹介しながら説明した。

また講演に関係する諸概念(「国家」「日本」も歴史的に変遷してきたことを述べた。

近世段階の「日本」では、近代的な「国家」「国民」は未成立であり、土地把握についても、道に頼った領域認識を克服した、面としての領域